

家庭内暴力に対する市民ボランティア相談員養成の試み（Ⅲ）

～エンパワメント演習の方法論的展開～

片岡 靖子 *山崎 きよ子 山西 裕美

Training volunteers as advisors for victims of family violence (Ⅲ)

～ A development of the method in the empowerment exercise, and evaluation measurement. ～

Yasuko KATAOKA *Kiyoko YAMASAKI Hiromi YAMANISI

Abstract

The present study examined the effect of participant's empowerment in the cultivation course for volunteer staff. According to self-evaluation assessment submitted by the participants after the course, most participants significantly improved their empowerment and provided accurate goal setting and approach for volunteer organisation.

As a part of course session, mutual exchange of participants and teachers in group discussion was also positively assessed that led the participants to increase activity and awareness of diverse values. Thus, the teaching method facilitating participant's empowerment need to be developed and included in the training course of social worker.

Key words : empowerment, empowerment self-valuation, concrete action, development of the method in the empowerment

キーワード : エンパワメント、エンパワメント自己評価、行動化、エンパワメント教授法の開発

はじめに

家庭内暴力による被害者の多くが、「私がいたらないから」「私自身ももっとがんばれば暴力を振るわれずにすんだのでは」など、暴力を受け続ける中で、自己の責任として捉え、暴力そのものへの否定や拒否といった行動を示す事ができない。これは、暴力を受け続ける過程で、自己への尊厳や信頼、さらに自己の人生への能動的な行動が喪失している状況が生じていると考える。

本稿では、被虐待者への相談を展開していく市民ボランティア養成を試みる過程を通して、自己の尊厳や信頼、そして自己の人生への能動的な行動を獲得していくためのエンパワメントアプローチのあり方について提示する

と共に、エンパワメント自己評価の方法と評価結果についての報告を試みる。

本稿の意義は、福祉系大学の社会福祉援助技術演習におけるエンパワメント演習教授法の開発、「自己エンパワメント評価尺度」の提示にも繋がっていくと考えている。

エンパワメントアプローチは、自己の内なる力へのアプローチ、即ち自己への尊厳や信頼、自己の人生への能動的な行動を引き出すだけでなく、家庭や組織、さらにコミュニティへ能動的に関わろうとする重要なアプローチ法であると考えられる。

ソーシャルワーク実践過程における エンパワメントアプローチについて

エンパワメントとは、スティグマ化された集団の構成メンバーに属していることでパワーレスの状態にあるクライアント、もしくはクライアントシステムなどを対象とし、クライアントやクライアントシステムのパワーレス状態を改善、もしくは軽減していくソーシャルワークの一連の実践過程である。クライアント自身、そしてクライアントシステムの構成員自身が、問題の解決の主動者であるということ自覚し、活用できる知識や技能を持っていることに気づき、援助者であるソーシャルワーカーと共に解決していくパートナーであり、仲間であることを認め、共に抑圧的な社会制度などへのパワーレスを及ぼす状況を改善、解決を目指し、行動へと繋げていくことを意識したアプローチ方法である。エンパワメントアプローチは、従来のソーシャルワークモデルである、「医学モデル」からの反省・批判から、「生活モデル」への枠組みへの変遷を経て、さらに「ストレングズ・モデル」へとソーシャルワーク実践の枠組み、視点の発達の中で重要視されてきている。クライアントの持つ才能、能力、社会資源に着目し、クライアント自身がそれらの能力を用い、問題解決へ取り組んで行こうとする行動への意識化、さらに実践といった点に注目し、評価している。エンパワメントアプローチは、ソーシャルワーク分野だけでなく、心理、教育、医療、看護など様々な分野でそのアプローチの展開が試みられている。

しかし一方では、エンパワメントは、ソーシャルワーク実践の使命、また自己実現というソーシャルワークの価値を実現するという原理であるとも定義され、エンパワメントの具体的な実践過程、また何を持ってエンパワメントと見なすか、またその有効性や効果性についてはあいまいな状況である。

また、エンパワメントは、貧困者、女性、高齢者、障害者、マイノリティーなどの抑圧されたグループや集団を対象とするだけでなく、前述したように、ヒューマンサービス、即ち心理、教育、医療、福祉等のニーズを持つ利用者や、主体形成という視点で、個人、集団、組織、さらに地域をも対象とし、それぞれの持つ課題達成への主体的関り、取り組みへのパワーの獲得といった援助が考えられている。

ソーシャルワーク実践過程におけるエンパワメントアプローチの実際は、ソーシャルワークの目的である、自己実現、そして主体性の形成、さらに個人、集団、組織、地域の自己解決能力の向上や手段の獲得という目的を遂

行していく上で重要な概念、価値にとどまっている。さまざまな分野で、エンパワメントアプローチの実際についての報告はある。しかし、エンパワメントアプローチ実践過程の科学的な実証研究、またエンパワメントアプローチの効果測定などについては未確立であるといえる。エンパワメントアプローチが、概念、価値にとどまるのではなく、その効果がどのようにすれば得られるか、またその実践効果の提示が急がれる。

市民ボランティアへの 「エンパワメント自己評価」の試み

1. 援助者側のエンパワメント自己評価の意義

家庭内暴力による被害者の状況は、虐待を受け続ける過程で、パワーレスの状態となっている。このパワーレスの状況は、問題解決への指向性を低下させ、家庭内に蓄積されたストレスがさらに激しい暴力を引き起こすことに繋がっていく。また、どのような人でも家庭内暴力の被害を受ける可能性を秘めており、このような状況に対して、早期発見、早期対応が必要であるということ、そして家庭内暴力に限らず、家庭内で起こった問題に対して相談を求める対象が友人、知人といった、身近な、インフォーマルなサポート提供者に求められていることから、市民ボランティアの育成は重要であると考えられる。

しかし、援助者側による「2次被害」の問題も注目されている。警察、弁護士といった専門職による執拗な暴力現場についての説明要求は、被害者への心的外傷を与えるとの報告も見られる。また、「女性は子どものために我慢すべきだ」「あなたが至らないから暴力を振るわれる」など、身近な家族や友人から、伝統的な価値観の中で指摘され、「2次被害」を及ぼしていることに気づかない現状もある。

また、家庭内暴力への対応が、児童、老人、女性など対象別に対応、制度が分断され、暴力の連鎖、暴力の双方向性の視点が欠如している。これらの状況は、それぞれの機関の連携、協力を阻み、問題の深刻化へと繋がっている。これらの状況から、DV問題に取り組む市民ボランティア自身が、家庭内暴力の構造、被虐待者への理解、ソーシャルサポートの必要性、被害者へのアプローチのあり方について学ぶと共に、援助者自身がエンパワメントの重要性について実感し、体得する必要があるとも考える。

市民ボランティアへのエンパワメント自己評価の試みは、援助者自身のエンパワメント効果を測定するこ

とを通して、エンパワメントアプローチの過程を具体的に実感、体得さらに講義内容評価していくことを目的としている。

今回のエンパワメント自己評価の試みは、サンプル数が少ないということ、今後のエンパワメント自己評価表開発のための試験的な評価、調査であり、今後のエンパワメント自己評価表の開発のための報告である。

2. 方法

N市男女共同参画主催のアドバイザー養成講座において、DV問題への市民ボランティア相談員の養成過程講座に出席した受講生40名のうち、計6回開催された講座を連続して出席した受講生19名を対象としてエンパワメント自己評価を実施した。

第1回目と最終回である第6回目に、エンパワメント自己評価の評価表の記入を依頼し、その結果を測定した。

測定の方法として表-1を作成、配布し回収を実施した。

前節でも述べたように、エンパワメントの効果性、また有効性についての評価方法、また測定方法については未確立であるといつてよい。そこで本稿では、受講生のエンパワメント測定について、表-1の13項目で実施し、各項目について0点から5点のスケールで自己評価とその変化を測定した。

このエンパワメント自己評価表の大きな目的は、評価項目の提示により、援助者である市民ボランティアへの援助者として必要なエンパワメントを実践する上での意識付けを行ったということ、さらに、初回の評価から最終評価を比べることによって、視覚的に自己エンパワメントの効果が変化したことを認識させることを意図している。即ち、このエンパワメント自己評価表を作成する過程の中でエンパワメント向上について自己認識が可能となるように工夫している。

3. エンパワメント自己評価表の質問項目について

エンパワメント自己評価表（表-1）は、13にわたる質問項目を設定した。

「①講師と皆さんとが協力、信頼して今日までの講義の運営が図れましたか？」の項目については、講師と受講生との相互交流が行われたか、また講師への評価としての項目でもある。

「②今日までの講義で、家庭内暴力に対する理解が深まりましたか？」という項目は、家庭内暴力そのもの

の理解、即ち援助者となる市民ボランティアのメンバーにこれから取り組む家庭内暴力について知るといふレベルから構造的理解ができたということの評価している。

「③皆さん自身は積極的に講義に参加することができましたか？」については、講義への参加の能動性について評価している。

「④出席者同士で、交流が持てたと感じられますか？」については、エンパワメントにおいて重要である他者、他機関への働きかけを想定し、相互交流ができたか否かを問うている。

「⑤本日まで、家庭内暴力について、ご家族やご友人と話をされましたか？」という項目については、受講生の言語化、行動化が図られたかということの評価している。

「⑥今日の講師や出席者は皆さんの思いを受け止めることができましたか？」については、講師を援助者として捉え援助者との協力関係の下に講義が展開されたかということについて自己評価をするとともに、双方向性に交流が持てたか、また協同性の下、講義を展開することができたかということの評価している。エンパワメントの過程で重要なのは、援助者との共同、協力関係において実施していくことであり、実感しているかということ測定している。

「⑦今日までに家庭内暴力についての新聞記事や書籍を読みましたか？」の項目については、⑥と同様、行動化、実践化に結びついているかということについて評価した項目である。エンパワメントの重要性は、行動力、実践力にどのように結びついたかということが重要である。また、この項目を初回評価で提示することで、受講者が意識的に行動するよう示唆している意図もある。

「⑧家庭内暴力は、自分自身の問題であるとの認識を持ちましたか？」については、問題の一般性、普遍性についての認識と、共感性を評価している。

「⑨今日までの講義において、皆さん自身の課題は見えきましたか？」についての項目は、家庭内暴力に対する能動性と課題発見能力について評価している。

「⑩相談員として自信が持てそうですか？」の項目については、相談員として携われるかということについての自己評価している。

「⑪自分自身の価値観などの気づきはありましたか？」自分自身の価値観の気づきが相談援助の過程において重要であるということ、また講義内容において

自己覚知を促す内容であったかどうかとも評価している。

「⑫人と人とのつながりの大切さを認識されましたか?」という項目については、また受講生同士の相互交流が図れる講義内容であったかということについて評価している。

「⑬継続的に相談員として活動できそうですか?」については、市民ボランティア相談員としての活動の意志とその継続性の可否について評価している。

以上13項目についての自己評価を、0から5点のスケールで自己評価し、受講初期、終期の評価の変化を視覚的に自覚していくよう作成した。

4. 結果

1) 個別の受講生の変化

各受講生のうち、初回時のエンパワメント自己評価表と最終時のエンパワメント自己評価表の中で、最も得点が伸びたA氏と、最も伸びが低かったB氏のエンパワメント自己評価表を提示した。図-1がA氏、図-2がB氏のエンパワメント自己評価表を示したものである。初回時と最終時に表を自己記入し、最終時に双方を配布し、自己比較してもらった。初回時よりエンパワメント自己評価が拡大している

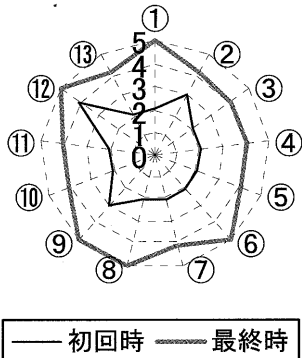


図-1. Aさんの初回時と最終時の比較

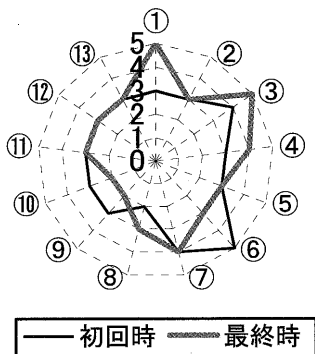


図-2. Bさんの初回時と最終時の比較

ことが視覚的に見ることができるようになっている。また、視覚的に受講生に見せることで、自己フィードバックも可能となり、さらにエンパワメント効果が増大する。「エンパワメント表で効果が見られ、嬉しかった」との感想も見られた。

2) 平均得点

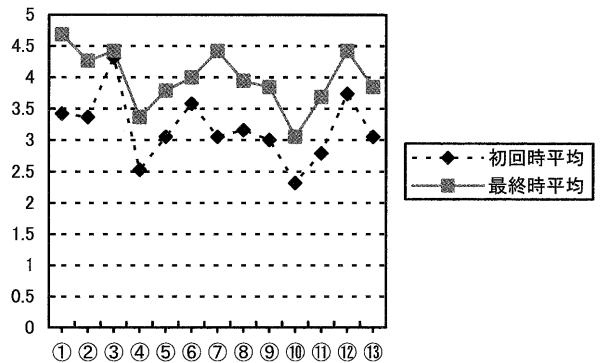


図-3. 各項目の初回時、最終時の平均得点の比較

図-3は、受講生19名の、受講初回時と最終時のエンパワメント自己評価表、13項目の変化を提示したものである。全てにおいて受講初回時よりも全体的に向上、拡大していることが分かる。

3) 各項目についての得点変化

エンパワメント自己評価項目、13項目の各項目について、受講前と受講後についての得点変化については下記の結果が得られた。

表-2. 13項目についての初回時と最終時の比較

項目	初回時平均得点	最終時平均得点	t 値
①	3.42	4.68	5.02 *
②	3.37	4.26	3.72 *
③	4.32	4.42	0.49 n.s.
④	2.53	3.37	3.44 *
⑤	3.05	3.79	3.07 *
⑥	3.58	4.00	1.46 n.s.
⑦	3.05	4.42	4.44 *
⑧	3.16	3.95	3.53 *
⑨	3.00	3.84	2.28 *
⑩	2.32	3.05	3.07 *
⑪	2.79	3.68	2.85 *
⑫	3.74	4.42	3.37 *
⑬	3.05	3.84	3.17 *

N=19

「①講師と皆さんとが協力、信頼して今日までの講義の運営が図れましたか?」という項目については、

$t(18)=5.01, <.05$ とその有意差が見られ、受講後には、講師と受講生間における信頼度が増していることが解った。

「②今日までの講義で、家庭内暴力に対する理解が深まりましたか？」という項目についても、 $t(18)=3.72, <.05$ とその有意差が認められ、家庭内暴力の事例、家庭内暴力の構造的理解が得られたことを示している。受講生の受講途中アンケートの中でも、「N市におけるDVの状況がわかり、改めて重要性を感じました」「テレビの報道の意味が解りやすく受け止める事ができるようになり、身近に感じながら観ています」「初めて耳にするDV法、またDV法の改正の視点を学び、アドバイザー養成講座を申し込み、良かったと思う」などの意見が見られた。

「③皆さん自身は積極的に講義に参加することができましたか？」という項目については、 $t(18)=.49, >.05$ と有意差は認められなかった。この項目が落ち込んだ受講生サンプル各自の感想と照らし合わせると、「相談を受けることに不安が大きくなった」「DVということについて、その内容は自分の理解を超えるものであった」との感想が見られ、元々アドバイザーとして受講しようと参加する積極的なグループは受

表-3. 項目③に対する初回時と最終時の比較

受講生サンプル	初回時点数	最終時点数	差
1	4	3	-1
2	2	4	+1
3	3	4	+1
4	5	5	0
5	5	4	-1
6	5	5	0
7	3	5	+2
8	4	5	+1
9	3	3	0
10	5	5	0
11	5	5	0
12	5	5	0
13	5	4	-1
14	5	5	0
15	5	5	0
16	5	4	-1
17	4	5	+1
18	5	4	-1
19	4	4	0

講当初から値は高いことが予測され、受講後も値が高いまま終了しているグループと、一方落ち込んでいるグループは、DVの内容の深刻さと専門的な相談援助の指導を受け、自信を失っているグループが5ケース見られた。

「④出席者同士で、交流が持てたと感じられますか？」という項目については、 $t(18)=3.43, <.05$ とその有意差が見られた。これは、最終講義において、グループ分けを実施し、家庭内暴力についてのグループディスカッションを通して、6回わたるに講義についてのまとめを行ったことが大きいと思われる。最終講義においてのアンケートには「受講生の方々の気持ちが解って良かった」「グループで感想、今後の取り組みについての話し合いはとても良かった。色々な意見が聞けて、まだまだ皆さんと勉強して行きたいんだなと同じ思いがあって良かった」「グループに分れて話し合う事により、より親近感を覚え、志しを同じくするものの和を広げる事ができたと思います」「皆の気持ちを聞けて良かった」「沢山のひとと知り合えて良かった」「グループごとに話し合いながら、お互いの考えを出し合い、その中で自分自身の考え、生きざまが良く解りました」「同じ講義を受けているのに、皆感想が違います。自分の価値観も他の人と比べて、少し分かってきたように思います。自分発見にもなりました」などの意見が聞かれました。受身的な講義よりも、受講生間の相互交流を用いたグループディスカッションは、1～5回目までの講義の振り返りを促すだけでなく、受講生自身が言語化することによって、より自分の知識や技術となるだけでなく、自己覚知も促すことに繋がった。

「⑤本日まで、家庭内暴力について、ご家族や友人と話しをされましたか？」という項目については、 $t(18)=3.07, <.05$ と有意差を認めた。エンパワメントで重要なのは、この行動化という点にある。具体的に受講生がどのような行動を実践したか、アンケートから抽出してみると、「帰って直ぐに家族と話しをした。皆真剣に聞いてくれた」「美容院でDVの話しをした。多くの女性がDVで悩んでおられるとも聞き、相談開設日のポスターを次回は持って行きたいと思っている」など、家族、友人、近隣の方々と、受講内容について話しをするだけでなく、身近に問題が存在しているという気づきも得ている。

「⑥今日の講師や出席者は、あなたの思いを受け止めることができていましたか？」という項目については、 $t(18)=1.45, >.05$ と有意差は認められなかった。最

終講義では、グループディスカッションを実施したが、その相互交流が上手く行かなかったメンバーである可能性が高い。しかし、個別のアンケートを見ると、「DVに関する基金の創設の必要性」「相談技術の向上」などの言葉も見られている。メンバー全員のエンパワメントを向上させるためのアプローチ手法の課題が見られた。

「⑦今日までに家庭内暴力についての新聞記事や書籍を読んでみましたか？」という項目については、 $t(18)=4.43, <.05$ と有意差が見られた。これは、質問項目①と同様、最も値が高かった。具体的には「本(DVのマンガ)を読んだ」「目や耳につくようになった」など、日頃の生活の中で発見し、取り組もうとする姿勢に変化している様子が見られた。この現実を知るだけでなく、家庭内暴力を捉える視点を獲得することによって、身近な事として捉えていく力を養い、さらに自分なりの考えを持って情報を捉える事ができる事に繋がっていくと考える。

「⑧家庭内暴力は、自分自身の問題であるとの認識を持ちましたか？」という項目については、 $t(18)=3.52, <.05$ と有意差が見られた。「連日、新聞紙上やニュースで、子供(児童)虐待やDVによる事件を観ますが、他人事とは思えなくなりました」との感想もあった。

「⑨今日までの講義において、皆さん自身の課題は見えてきましたか？」という項目については、 $t(18)=2.28, <.05$ と有意差が見られた。アンケートの中でも、「夫にしているかも？子供に少ししているかも？」「自分磨きに努力していきたい」「DVや悩みは一人で悩まないで、言葉に出して、暴力はいけない事、世間体など考えない」「仲間が沢山できたので、輪を作り続けたい」「まだまだ勉強させて下さい」「相談員として実力をつけること」「NPO法人を立ち上げてより充実したものになりたい」「DVシェルター基金を何らかの形でできると良い」「前向きに、自分も含めてまわりの人々も幸せに生きていけるように努めたい」「PR(広報活動)をすることと、相談業務の研修を重ねていくことが必要」「相談業務に関する者とその機関とのネットワーク作りが重要な作業」「相談者の気持ち、立場をしっかりと受容し、信頼していただけるアドバイザーを目指したい」「DVで離婚された場合、その後のケアは当事者で克服するしかないのでしょうか？そういう人が集まって助け合える団体？サークル？相談所？みたいな所が必要」「もっと、もっと研修を積んで行きたい」「人間関係をスムーズにすること、社会

に目を向けて個を生きること」「DVのことを良く知り、情報に敏感でいたいと思います」など、非常に具体的な課題が提示されている。この課題について整理してみると、自分自身の内的成長の課題、次に研修継続による自己成長や相談員としての技術習得課題、組織化やネットワーク構築、資源開発などの課題へと広がっている。エンパワメント評価において最も重要な項目である。

「⑩相談員としての自信が持てましたか？」という項目については、 $t(18)=3.07, <.05$ と有意差が見られた。しかし、受講生のアンケートの内容を見てみると、「言葉の難しさを感じる」「ダメダメ絶対無理」との意見がある一方、「早く相談者と会話してみたい」「できる事から始めたい」、また「研修を継続しより良い相談員になりたい」との意見があった。これらの意見をまとめてみると、実践で学んだことを発揮したいというグループと実践にはまだ経験や研修不足と考えるグループ、そして研修によって逆に相談業務の困難さを感じ無理だと思ったグループに分かれた。今後研修に取り組む上で、このようなグループの特徴を把握し、ボランティアへの継続的な研修保障の必要性があるということと、自信を喪失したグループに対して、さらに実践的で実感を伴う研修内容の開発が課題であることが解った。

「⑪自分自身の価値観などの気づきはありましたか？」という項目については、 $t(18)=2.85, <.05$ と有意差が見られた。アンケート内容についても多くの記載があり、「相手の気持ちを大切にする」「相談者を少しでも安心させてあげたい」「直ぐに結果を出したがるのはよくない」「守秘義務の重要性」「自分の価値観で判断しない」「一人で抱え込まない」「理由はなんであれ、DVはしてはならない事を再認識しました」「各人がそれぞれの価値観を持ち、私自身の価値観の差があるとしても、それを認められるし、受け入れる事ができるような気がする」「他人事ではないと思いました」「人間関係を維持確立することの難しさ」などの感想が見られた。これらの内容から、講師のメッセージであった、相談者の価値観で判断しない、守秘義務の重要性、自己決定の原則、一人で抱え込まないなどが伝わっていることを再確認できたと共に、受講生自身の言葉で語れるようになったことも伺えた。

「⑫人と人とのつながりの大切さを認識されましたか？」という項目については、 $t(18)=3.37, <.05$ と有意差が見られた。研修内容において、相互交流が持てるようなプログラムを設定したことも効果が出た要因と

思われる。受講生の参加の様子を見ていても、講師からの一方的な講義形式で終るのではなく、講義終了後もしくは受講生同士の相互交流の時間をプログラムに設定することで、講義内容の再確認、理解内容の比較、個々人の価値観や思いの共有、相違に気づくことが可能となる。

「⑬継続的に相談員として活動できそうですか？」という項目については、 $t(18)=3.17, <.05$ と有意差が見られた。受講生のアンケートでは、「少し不安がとれました」「頑張っってやって行きたい」「まだ自信が持てない」などの記載も見られた。

4) 調査結果についての考察

エンパワメント自己評価表を使用して、受講生のエンパワメント自己評価を実施した結果、明らかになったことは、全体的にエンパワメントが向上し、具体的な行動や実践に繋がったという点についての効果見られたということが出来る。また、演習形式での講義内容が、講師と受講生、また受講生同士の相互交流を生み出し、講義内容についての定着と言語化、さらに自己の知識と技術の獲得、価値観や気づきへの促しに繋がっている事も明らかになった。しかし、結果の中で相談員としての自信を獲得したグループと研修継続性を望むグループ、さらに自信を失ったグループが見られ、この点について今後研修プログラムの再開発、さらに研修の継続性という課題を残した。

おわりに

家庭内暴力に対する市民ボランティア相談員養成において、受講生にエンパワメント自己評価表を使用して、講義内容の評価、さらに受講生自身のエンパワメントの効果について評価を試みた。

その結果明らかになったことは、6回の講義を通して、全体的にエンパワメントは拡大しており、講義内容が個々の受講生にとってエンパワメントが拡大するという効果が出せたということがいえる。特に講師と受講生、また受講生同士の相互交流を意識した講義内容の設定は、多様な価値観や考えを知ると共に、個人の価値観の気づきや再考を促すことに繋がったといえる。さらに、相互交流の中から、自己の課題の発見、さらにエンパワメントにおいて重要な要素である行動化へと繋がっていったことが解った。家庭内暴力についての新聞記事やテレビのニュースを意識して観る。また、家族や友

人との会話の中で話題とし、家庭内暴力について共に考えてみるなどといった行動化は、個々の受講生の大きな成長に繋がったといえる。

これらのエンパワメントの効果を意識した講義内容について整理してみると、1つは、相互交流性を持った講義内容の設定が重要であるということがいえる。講師の役割は、受講生が自らの言葉で自由に語ることができる環境や場所を提供することと、語られた内容について、ストレングスの視点で、エンパワメントしていくことがさらに受講生のエンパワメントを高めることに繋がっていくと考える。次に重要となってくるのは、自ら事実を知ろう、誰かに話してみようという行動化へと繋がっていくことである。実際に、受講生の中には、「新聞記事やテレビのニュースで、家庭内暴力の事件が耳につくようになった」などの報告があったが、個々の受講生が自分に無関係なこととの意識から、身近な問題として感じるようになり、事実を知るといった行動化、さらに家族や友人と話して見るといった共有化への行動化が見られたことも重要なことである。この知りたいといった行動化、身近な人々との共有化への行動化といった変化は、家庭や地域を変えていく原動力ともなると考える。さらに、身近な友人や地域住民に家庭内暴力に苦しむ人々がおられるのではと言った問題発見の視点拡大することにも繋がりが、家庭内暴力が密室化、孤立の中で生じやすい現状において、重要な要素であるとも考える。これらの行動化については、エンパワメント自己評価表の中で、意図的に質問項目として設定し、意識化したということと、最終講義において実施したグループディスカッションにおいて、「今後の活動の方向性」ということで、具体的な行動のあり方について自由な意見を述べられる場面設定を行ったことも効果に繋がっていったと考える。さらに効果が見えたのは、「研修の継続」を求める受講生が多かったことが上げられる。常に研修を継続し、より良い相談員となっていくとする意欲の向上が見られたことは、今後市民ボランティアとして、さまざま問題への取り組みへと繋がっていくと考える。

市民ボランティア養成講座でのエンパワメント自己評価表を試みて、自己のエンパワメント効果が向上したという効果が見られた一方で、相談員として活動する自信がないといった受講生グループが見られたことが残された課題として上げられる。これらのグループは、ボランティア相談員としての責任や専門的相談技術をしっかり獲得していかなければ実践することは怖いといった意見が見られた。これらの意見に対応していくためには、より実践に近い講義内容を繰り返し、繰り返し提供してい

く必要性を感じた。また、ロールプレイの実施、さらに実際の相談場面での実習など、具体的な場面での研修などによって自信を高めることができるのではないかと考える。今後の講義内容の課題としたい。

今回は、家庭内暴力に対する市民ボランティア相談員養成の試みとして講義内容を構成し、エンパワメント自己評価の実施を試みた。これらの実践は、福祉系大学における社会福祉援助技術演習の教授法の開発へと繋がっていかとも考えている。社会福祉系大学における社会福祉援助技術演習は通年科目となり、その授業の重要性が増している。社会福祉理論をより実践に近い形で、社会福祉援助技術演習で習得し、さらに社会福祉現場実習指導、社会福祉現場実習へと繋げていく必要性があり、またそれぞれの講義内容が一連の流れを持ったものとして構成される必要性を感じている。また、社会福祉研究においても、社会福祉理論と社会福祉実践の双方向性を持った研究がなされるべきである。さらに、社会福祉実践の有効性や評価といった科学的評価の取り組みを急がれる。これらの課題への1つの挑戦としての取り組みであった。既に社会福祉援助技術演習の講義においてエンパワメント自己評価表の活用を試みており、その内容、効果について次回の報告とさせて頂きたい。

参考文献

- Barbara Bryant Solomon: Black Empowerment. Columbia University press New York, 1976.
- Einat Peled, Zvi Eisikovits, Guy Enosh, (etc) : Choice and Empowerment for Battered Women Who stay: Toward a Constructivist model, Social Work, Volum45,Number1,2000.
- Fran S. Danis: The Criminalization of Domestic Violence: What Social Workers Need to Know. Social Work, Volume48, number2, 2003.
- 平田佳子: 電話相談による児童虐待への対応—ソーシャルワーク実践の立場から. ソーシャルワーク研究, Vol.17No.3,1991.
- 保正友子: 学生のエンパワメントを促す社会福祉援助技術演習の検討. ソーシャルワーク研究Vol.28No.3, 川島書店, 2002.
- 狭間香代子: 社会福祉実践におけるストレングス視点と社会構成主義, 社会福祉研究第76号, 2000.
- 久保美紀: ソーシャルワークにおけるEmpowerment概

念の検討—powerとの関連を中心に. ソーシャルワーク研究Vol.21 No.2,1995.

小松源助: ソーシャルワーク実践におけるエンパワメント・アプローチの動向と課題. ソーシャルワーク研究Vol.21 No.2,1995.

中村佐織: ソーシャルワークにおけるエンパワメントの意味—アセスメントとのかかわりから—. ソーシャルワーク研究Vol.21 No.2,1995.

佐藤豊道: 暴力・虐待とソーシャルワーク. ソーシャルワーク研究Vol.29 No.1,2003.

須藤八千代: ドメスティック・バイオレンスとソーシャルワーク. ソーシャルワーク研究Vol.29 No.1,2003.

園田純一,平川忠敏,高山巖他: 保健福祉分野におけるエンパワメント—心理学およびコミュニティ心理学の立場から. 九州保健福祉大学研究紀要第3号2002.

山崎きよ子山西裕美: 家庭内暴力 (Violence in the family) についての研究—意識と実態及びsafety netの在り方. 九州保健福祉大学研究紀要第4号2003.

山西裕美,山崎きよ子: 家庭内暴力における暴力の双方向性と連鎖についての研究. 厚生指針第51巻第8号厚生統計協会2004.

横山譲: ソーシャルワーク教育における援助技術演習の持ち方と課題. ソーシャルワーク研究Vol.24 No.2,1998.

要旨

本稿は、家庭内暴力に対する市民ボランティア相談員養成講座において、講座の内容についてエンパワメント自己評価表を使用して評価すると共に、受講生のエンパワメント効果の評価を試みた。評価の結果、受講生全体のエンパワメントが向上したことが解った。特にエンパワメントにおいて重要である行動化、実践化についての効果が大きく、多くの受講生が具体的な自己課題の設定、さらに市民ボランティア組織としての今後の取り組みなどを提示できていた。また、講師と受講生、受講生同士の相互交流ができたとの評価も高く、講義内容においてグループディスカッションの設定したことが、受講生の能動性を高め、さらに講義内容を言語化し、グループ内での多様な価値観の気づきを促すことへと繋がっていったと考える。

今後、エンパワメントを促す社会福祉援助技術演習授業開発へと繋げていくことができるとも考える。

表-1

自己評価日付 年 月 日

名前
エンパワメント自己評価表
今日の講義に参加して、自己評価してみましょう。

評価内容	高 → 低	自由記載
①講師と皆さんとが協力、信頼して今日までの講義の運営が回りましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
②今日までの講義で、家庭内暴力に対する理解が深まりましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
③皆さん自身は積極的に講義に参加することができましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
④出席者同士で、交流が持てたと感じられますか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
⑤本日まで、家庭内暴力について、ご家族やご友人と話しをされましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
⑥今日の講師や出席者は、あなたの思いを受け止めることができていましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
⑦今日までに家庭内暴力についての新聞記事や書籍を読みましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
⑧家庭内暴力は、自分自身の問題であるとの認識を持ちましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
⑨今日までの講義において、皆さん自身の課題は見えてきましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	(課題を記述してください)
⑩相談員としての自信が持てましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
⑪自分自身の価値観などの気づきはありましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	(気づいた価値観を記述してください)
⑫人と人とのつながりの大切さを認識されましたか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	
⑬継続的に相談員として活動できそうですか？	5⇒4⇒3⇒2⇒1⇒0	

エンパワメント自己評価グラフ

